

第1章 女性の解放と政治参加

エジプトの女性解放の動きは、アラブ世界の先駆的な女性解放として常に多くの研究者が取り上げている問題である。これまでのエジプト女性の政治参加を扱う文献をみると、非常に限られた年代か、あるいは歴史上の著名な女性のみ焦点をあてたものが主であった。しかし、最近になってエジプト人女性研究者によって、女性の政治参加を総合的に考察した文献がみられるようになってきている。たとえば、アブデル・カーデル (S. Abdel Kader) の『社会変化におけるエジプト女性；1889-1987』(E26)や、サーレフ (S. K. Şāleḥ) の『女性の政治参加と社会変化の力』(A53)がそれである。また、今まで注意されることが少なかった特異な女性の運動にまで目が向けられ始めているのも興味深い。

本章では、このようなエジプトの近代化の過程において女性運動や女性の地位・役割について論じた文献を紹介する。

I. 近代における女性解放とフェミニストたち

近代のエジプトにおける女性解放は、常に近代化に呼応した動きとして位置づけられる。エジプトの近代化政策は、ムハンマド・アリー統治期の19世紀初頭から始まり、この時期にはフランス留学から帰国した多くの知識人や思想家が、西洋に強く影響された近代的な思想を展開している。また、同時代にはムハンマド・アブドゥフを指導者とする近代主義的イスラーム改革運動が起こり、20世紀のイスラーム改革思想に決定的な影響を与えた。彼らは、合理主義の立場にたって伝統を革新することこそ、父祖(サ

ラフ)の時代における真の本源的なイスラーム精神の復興であると主唱するものである。この近代主義的イスラームは、女性問題においても重要な方向づけを行ったといえる。なぜなら、近代の女性解放に関する論争は、このイスラーム改革思想家の間から発生したからである。そのひとりがエジプトの女性解放の先駆的な主唱者とされるカーシム・アミン(Qāsim Amīn)である。

彼は、1899年に『女性の解放』(A18)、続いて1901年に『新しい女性』(A19)を著し、当時の知識人の間に大論争を巻き起こした。たとえば、この著作のなかには、次のような表現がみられる。「我々は、決してシャリーアのなかにベールを義務づける文章を見いだしてはいない。(途中略)それは、いくつかの国の混在から広められた習慣である。(途中略)ヨーロッパにおける男女間の共生(ikhtilāf)と同じようにアラブやエジプトの村の女性たちは、男性と共同生活を営んでいる。そこでは都会のベールを着けている女性たちにみられるような虚弱さは、ほとんど好まれない」(『女性の解放』女性のベールの章)。すなわち彼は、女性を社会的に隔離し家庭に束縛する象徴とされるベールからの解放、さらには女性の教育と労働の権利、一夫多妻制の禁止、男性に与えられた離婚権の制限などを主張したのである。これに対してイスラームの伝統を遵守しようとする伝統主義者や民族主義者は、イスラーム改革派の女性解放論を西欧的思想と見なして、女性の教育や労働、政治参加に対しては反対の立場をとっていた。

初期のエジプト人研究者や欧米研究者は、常にアミンの女性解放論に焦点をあて、特に、

西洋主義者と伝統主義者の対立に関連させて論じる傾向にある。たとえば、フィリップ (T. Philipp) の『エジプトのフェミニズムと民族主義政治』(E67)は、女性解放を主張するイスラーム改革主義者と、タラアト・ハルブ (Tal'at Ḥarb) のような反西洋の立場をとる民族主義者との間の論争を考察する。当時のエジプトにおいて比較的自由的な思想を持っていたシリア系女性が社会進出していた状況を説明し、民族主義者たちは、女性解放とはこのような外国人の侵入を促し、エジプト国家の弱体化そして社会的不道徳と退廃を招く西洋化現象と見なしていたと分析している。

これに対して最近のエジプト人研究者の間では、トルコ人系のアミンよりも、むしろ、彼の師であるムハンマド・アブドゥフ (Muḥammad 'Abduh) を評価する傾向が強い。たとえば、アマアラ (M. 'Amāra) の『カーシム・アミン：女性解放とイスラーム的開化』(A65)は、アミンの思想をはじめ、彼の履歴や女性解放を主張するに至った環境、友人関係、さらには当時のエジプトの社会環境についても考察の対象としている。特に、アミンがパリ留学中に伝語で著した『エジプト人たち』と比較しながら彼の思想の変化を指摘している点が興味深い。すなわち、『女性の解放』のわずか5年前に出版された同文献には、19世紀のエジプト女性が置かれた状況を肯定する視点が貫かれているため、アマアラは、この間にアミンの女性に対する思想が大きく転換したと見なす。彼は、アブドゥフの思想的影響を指摘するとともに、アミンとアブドゥフとの共著であるとすら述べている。

また、アマアラの『イスラームと女性：イマーム・ムハンマド・アブドゥフの見解において』(A63)(A64)は、男女平等や一夫多妻、離婚、結婚関係における男女平等についてアブドゥフの主張を詳しく紹介したものである。たとえば、

一夫多妻についてはコーランの「汝らが良いと思う女を2人でも、3人でも、4人でもめとれ。しかし公平に遇し得ない恐れがあるならば、ただひとりだけめとるか、または汝らの右手が所有するものをめとれ。このことは不公平を避けるために最も妥当である。」(第4婦人章3)を引用して、何人もの女性を同等に扱うことは人間の能力を越えた行為であるから、ただひとりの妻との結婚を要求したと柔軟的に解釈する。さらに同文献は、アブドゥフが教育における男女同等の権利を主張していたことなども指摘している。

コール (J. R. Cole) の『世紀の転換期のエジプトにおけるフェミニズム、階層、およびイスラーム』(E38)は、フィリップと同様に民族運動とフェミニズム論争に焦点を当てたものである。しかし対立する両者の出身階層や当時の社会変化を考察し、フェミニズム論争は、単なる西洋化をめぐる問題ではなく、エジプト国内の社会階層間闘争に根ざしたものであったと見なす。たとえば、トルコ系地主で上層の出身であったアミンのようなイスラーム改革主義者が、西洋の進歩に追いつくための基本的な一歩として女性解放を位置づけた。一方、中間層下層出身であったハルブのようなイスラーム伝統主義者は、女性の隔離を通じて一族の名誉が護られるという価値観に立って女性解放に反対したというものである。したがってこの論争は、当時の社会階層とイスラームに対する認識の相違に基づくものであったと著者は説明する。なお、コールもアマアラと同様な観点に立って、アミンの思想の展開とアブドゥフの関係を分析しているのが興味深い。

さて、アミンの女性解放思想に強く影響を受けたひとりのエジプト人ムスリム女性が登場する。彼女バーヒサト・アル・バーデヤ (Bāḥithat al-Bādiya) — ベドウィン女性研究者の意味のペン

ネーム。本名はMalak Ḥifnī Nāsif)は、1907年に創刊された改革主義派の新聞『アル・ジャディード』(al-jadīda)に当時の女性としては珍しく詩や散文を活発に発表した。また、エジプト女性として初めてベールからの解放、教育・労働における男性と同等の権利、一夫多妻制の禁止、結婚において女性が夫を自分自身で選ぶ権利、さらに参政権などの要求を行った女性であった。彼女の一連の論説は、『フェミニスト論』(A21)と題して1910年に刊行され、また1920年にはアブドゥル・マラク(B. 'Abdul-Malak)によって『バーヒサト・アル・バーディヤの回想』(A58)が編纂されている。彼女は中間層上層の出身で、この階層の女性では当時希であったが4年間教職に従事し、結婚後、このような文筆活動に入ったという。しかし、彼女に関する研究は、後述するサブキーとバドランの文献のみで非常に少ない。

ところで、アミンが女性解放の対象としたのは、上層及び中間層上層、そのなかでも特に19世紀後半に登場した新中間層の女性たちであった。彼は、上層および中間層上層の女性たちが教育を受けているが、しかし、文化・知識・経験においてその教育を役立てることができない隔離された社会に生きていることを問題にした。一方、それ以外の階層の女性、特に農民や商人層の女性たちについては、彼女らは無教養ではあるが、経験豊富な文化(al-thaqāfa)があり、男性と同様に働き、世間を知っている階層であるとアミンは述べており、興味深い。

アミンと同様に、多くの歴史研究者も20世紀以前には都市下層や農村の女性たちが男性とともに農作業や商業に従事していたことを確認している。このような女性に焦点を当てた研究としては、たとえばトミチェ(N. Tomiche)の『19世紀前半におけるエジプトの女性状況』(E83)

がある。同文献は、ムハンマド・アリー期の社会構造の急激な変化と関連させて伝統的な女性の生活を概観している。当時の女性は、農村や都市において夫や家族または同族集団の所有物であり、きわめて自由を制限された存在であった。しかし彼女は、一部の女性たちが暴動に参加し、夫へ反抗する場合もあったことをエジプト人歴史家ジャバルティなどの文献を引用して説明している。そして、このような例外的な女性の活躍は、フランスの侵略やムハンマド・アリーの国家建設によって農村の社会構造や伝統が揺らぎ、男性の代替として女性が徐々に労働や教育の場へ押し出されていった状況と関連していたと解釈している。

また、タッカー(J. Tucker)の『19世紀のエジプトにおける女性』(E85)第4章と『反抗する女性：19世紀のエジプトにおける女性と国家』(E84)は、19世紀初頭の女性の政治参加と犯罪行為について考察したものである。当時、ムハンマド・アリー政権によって導入された賦役・徴兵制度や新たな税制に対して継続的に農民暴動や都市暴動が発生していた。彼女は、男性と並んで多くの女性がこの暴動に参加していた点に言及し、当時の社会がこのような女性たちの抗議の重要性や彼女らの活動を容認する態度であったと述べている。しかし、その後国家体制が整備され、権力が強化されるにつれて政治運動が抑圧され、女性が政治的に行動する範囲が狭まっていった。さらに、エジプトにおける政治運動の中心が民族運動に移るにつれて、エリート知識人や有徳の女性たちだけが運動の中心になり、特権階層ではない女性や下層の民衆は、政治活動の場から除外されていったと彼女は説明している。

II. 政治参加の要求— 1919年革命期の女性運動

1919年革命は、サアド・ザグルール (Sa'd Zaghlūl) を指導者とする反植民地主義運動の重要な一事件であった。この民族運動において女性によるデモが組織されるという、エジプト女性史においても画期的な出来事が起こっている。このデモへの参加者は、当時の民族運動の主体であったワフド党員の妻たちが中心であり、その指導者は、ワフド党指導者のひとりであるアリー・シャアラウィー ('Ali Sha'rāwī) の妻フダー・シャアラウィー (Hudā Sha'rāwī) であった。そしてこの事件を契機として、エジプト女性の運動は、民族運動から女性解放運動へと発展していった。特に、1923年にはシャアラウィーが女性隔離の象徴とされていたベールを初めて脱ぎ捨てて物議を巻き起こしたが、その後この現象がエジプト社会に急速に浸透し、「Rafī hijāb」(ベールを上げること) が女性解放を意味するまでになっている。

この時期の女性運動については、多くの文献が取り上げている。特に、近年の主な文献ではアル・サブキー (A. al-Sabkī) の『エジプトにおける女性運動』(A37)、サーリム (R. Sālim) の『エジプト女性と社会変化1919~1945』(A36) がある。両書とも、女性運動を民族運動史と平行させて、主要な事件や人物を叙述する形式をとる。前書は1919年革命から1952年革命における女性運動を扱い、当時の女性の政治的役割について述べるものである。また、サブキーの文献は、バーヒサト・アル・バーディアや、シャアラウィーなどの女性活動家、エジプト女性連盟 (al-ittihād al-nisā'i al-miṣrī), ムスリム女性同胞団 (al-ikhwāt al-muslimāt), エジプト女性党 (al-ḥizb al-nisā'i al-miṣrī), ビント・アル・ニール連盟 (Ittihād bint al-nīl—ナイルの娘連盟) など主要な女性団体を紹介し、さ

らに当時の結婚や離婚、一夫多妻制、女性教育などについても説明する。両書とも当時の女性に関する多くの情報を含み有益である。

また、シャアラウィーの活動や思想については、多くの文献が取り上げている。まず、彼女の自伝『近代アラブの女性指導者の追憶』(A48) とその翻訳 (E76) (E77) があり、特に、彼女がワフド党から離れ、エジプト女性連盟を組織した経緯やパレスチナ問題に早くから関心を示した点などが興味深い。

また、マルソット (A. Marsot) の『エジプトにおける革命的な貴婦人たち』(E61) は、イスラームにおける女性差別やハーレムの怠惰な日常生活といった中東の女性に対する固定観念を打ち消すことを狙ったものである。彼女は、エジプトの農村社会における女性の役割やイスラームにおける女性の権利、さらにカイロのハーレムにおける活気に満ちた日常生活や慈善活動を説明した後、1919年革命以降のシャアラウィーの女性運動やヒディーヤ・バラカート (Ḥidiya Barakāt) など上層の女性たちによる慈善活動を考察している。

フセイン (A. Hussein) の『エジプトの社会改革における女性の役割』(E57) は、1920年代のシャアラウィーを中心とした女性運動に言及するとともに、第二次大戦後の女性団体の活動、特にサンディウーン (Ṣandi'ūn) 村において最初に行われた「カイロ女性クラブ農村委員会」(Village Committee of the Cairo Women's Club) の活動を紹介している。このような農村女性の生活向上に向けた活動は、エジプト近代史上において初めての試みであり、当時としてはきわめて先進的なものであったと思われる。

この他にバドラン (M. Badran) の『世紀の転換期に現われたエジプト女性3人の著作にみられるフェミニストの観点』(E33) がある。この文献は、シャアラウィー、バーヒサト・アル・

バーディヤ、そして女性教育の発展に貢献し、エジプトの「教育の母」と呼ばれているナバウィーヤ・ムサー(Nabawiya Mūsā)について分析したものである。パドランは、19世紀後半のエジプトで成長した新中間層に属する女性たちが置かれた状況を説明し、エジプトのフェミニズムは、従来言われているような単なる西洋化現象でも上層女性のための運動でもなく、上流層下層や新中間層の女性による地域固有のフェミニズムであったとする。特に彼女らの女性運動が女子初等教育に貢献した点を指摘して、この時期の女性運動を高く評価するものである。

次に1919年革命以降のエジプトの女性運動の位置づけに関する文献を紹介してみよう。まず、レバノン的人类学者アル・ハマーシュ(S. al-Khamāsh)は『アラブ女性と多様な伝統社会』(A31)のなかで次のように述べている。「女性運動は、貴族層、富裕層、中間層上層の女性たちによって起こされた運動であった。富裕層の女性たちは、彼女らの肉体的解放のための要求を行ったが、これは彼女らに与えられた社会的機会からみて不思議ではない。彼女らの両肩には経済的重圧がかかっておらず、また彼女らの目は西洋女性の伝統に向けられていた。また、中間層の女性は、上層の女性の伝統を模倣しようとした。したがって、この女性解放は、上層の女性に対して急速な成果をもたらしたが、それに比べて底辺層の女性たちにはほとんど利益をもたらさなかったことは明らかである。」(p.3~4)

一方、エジプトの代表的な歴史学者であるアニス(M. Anis)とハッラーズ(al-Sayd R. Harrāz)は『近代エジプト社会への政治的発展』(A20)において、この運動が女性解放運動であることを否定し、次のように位置づける。「1919年革命への女性の参加は、20世紀初頭に始まったこの革命運動における最終的な象徴と見なさなければならない。しかし、この女性の革命への

参加は、エジプトの女性解放運動ではなく、むしろ女性の政治運動として展開したものであり、多くの欠点が入り混じっていた。なぜなら女性の運動は、革命的な発展を遂げることなく、またその結果、労働者の運動に起きたことと同様の経緯をたどった。すなわち、女性の運動は、ある時は宮廷の利益に奉仕し、時には野党に利用されるなど、かなり不統一の印象を与えたままで、民族主義的な政治運動の領域から後退し、社会福祉の領域に活動を限定することになった。」

以上の文献にみられるように、この時期の女性運動は、女性全体の地位の向上を目指した女性解放運動とは見なすことはできないが、エジプト女性運動の出発点として位置づけられている点では一致している。

III. 女性運動の組織化

—1940年代から1952年まで

エジプト女性連盟は、エジプトの女性運動の指導的団体であったが、1947年にシャアラウィーが死亡した後、強力な指導者を欠いたまま女性の慈善活動、社会奉仕活動に性格を変えていった。したがって、今までこの時期は、一般的にエジプトの女性運動の衰退期とみられていたが、最近になって欧米研究者のなかに、これを見直す動きが出ている。確かに、ビント・アル・ニール連盟やエジプト女性党が新たに設立され、女性の政治的権利や結婚・離婚の自由を要求する本格的な女性運動が展開されており、この運動の指導者らの文献からもそれがわかる。

たとえば、ビント・アル・ニール連盟の指導者であったドリヤ・シャフィーク(Duriya Shafiq)は、『ファラオから今日までのエジプト女性』(A51)、『エジプトにおける女性覚醒の発展：ムハンマド・アリー時代からファールーク時代まで』(Ibrāhīm 'Abduh 共著)(A52)、『私の世界旅行』(A50)などを著しており、彼女の思想や活

動を知る手がかりとなる。特に文献(A52)は、イスラームにおける女性の地位やムハンマド・アブドゥフの思想を引用して、イスラームが何ら女性の権利を侵害するものでないことを確認したうえで、女性の教育問題や女性の能力、下層女性の生活向上を助けるエリート女性の義務、エジプト女性連盟の活動などについて言及するものである。また同書から、1948年のビント・アル・ニール連盟設立に結びつく彼女の思想を理解することができる。また、彼女の『エジプトのフェミニズム』(E75)は、上記の文献等を要約したものである。このなかで彼女は、男女平等に対する障害は、現在の地位を維持しようとする男性側の抵抗であるとし、そのためには一夫多妻制や男性による一方的な離婚を禁止する法の確立に向けた女性運動が必要であると訴えている。シャフィークは、また1945年から『Le Journal d'Egypte』(仏語)と『Bint al-nīl』(アラビア語)の雑誌の編集長を務めるなど、中間層のエリート女性を対象とした西欧的な「近代女性」をイメージさせるファッションや生活スタイル、文学等の熱心な紹介者でもあった。

一方、この時期にはシャフィークのように議会政治の場への女性の進出を通じて既製の政治秩序の内部で社会変革を要求する、インテリ中間層のやや保守的なイデオロギーとは別に、労働者や学生を動員して社会平等と公正のための闘争を展開した共産主義者らの活動がみられた。『私たち、エジプト女性たち』(A15)を著しているインジー・アフラートゥーン(Injī Aflātūn)がそのひとりである。彼女は、この著書の冒頭において「エジプト女性たちへ。エジプト人民の半分を構成する数千万の仲間へ。農婦、女性労働者、女性事務員、若き女性、主婦、母親たちへ、この書を献じる」と記しており、彼女の意図した運動の拡大と、特に女性労働への関心の深さが窺われる。

さて、上記のような運動についてハーテル(A. Khater)とネルソン(C. Nelson)の『近代エジプトにおける女性の運動と政治参加』(E58)は、1920～30年代のエジプト女性連盟中心の、いわゆるトルコ系のエジプト人上層の女性運動における衰退過程とは別に、1940～50年代にはビント・アル・ニール連盟や共産主義的なフェミニストたちによる女性運動が本格化したことを指摘している。すなわち、この時期は、イデオロギーや戦略・目的が多様化した中間層の女性たちを中心とする女性運動が生まれたという説である。この文献によると、ビント・アル・ニール連盟のメンバーは、弁護士や教授、カイロ大学の卒業生、女子高等師範学校の教師、教育省の監督官(nāzīr)などで、主にデルタ出身の中間層の若い女性たちが参政権を求めて活動を行っていた。たとえば、シャフィークは参政権の獲得に向けてデモやハンガーストライキを指導し、さらに1957年には彼女自身がインド大使館に亡命を試みるなど活発な活動を展開していた。また同文献は、アフラートゥーンらの運動にも言及し、初期の彼女らの活動は、英国支配に反対する民族運動であったが、徐々に民族解放と女性解放を結合させる方向をたどったという。たとえば、サイイダ・ゼイナブのような庶民地区に運動の拡大を狙い、また1951年のスエズ運河地帯の反英武力闘争の際には「女性人民抵抗委員会」(al-Lajna al-nisā'īya lil-muqawwama al-sha'bīya)を組織し、ムスリム女性同胞団と共に活動を展開した。しかし、1952年革命以後、このような共産主義者や左派の女性活動家は、政府に活動を規制されると同時に、社会問題省との一定の関係を保つなど活動の二面性を持っていた。また、1956年1月に発布された選挙法においてナセルは、女性の選挙権は認めたが被選挙権は認めなかったため、左派の女性たちは1957年選挙において女性選挙委員会ともいべき組

織を設立して女性労働者を動員し、セザ・ナバラウィ(Ceza Nabarawy)を当選させ、実力行使によって被選挙権を獲得したという。しかし、1959年に多くの共産主義者が逮捕され、組織活動が禁止されるに至って女性問題は、社会問題省の枠組みのなかに統合されていったと説明する。

同様に、ボトマン(S. Botman)の『急進的なエジプト政治における女性の参加1939-1952』(E37)および『エジプトの共産主義運動における女性の経験1939-1954』(E36)は、エジプトの共産主義運動に参加した女性の活動について述べている。特に第二次世界大戦期の1940年代は、イギリスの支配が弱体化し、イスラーム原理運動や共産主義運動が隆盛を迎え、民族主義運動の最も高揚した時期であった。女性の共産主義者は、共産主義の地下組織とは別に、50数名からなるエジプト女子学生・卒業生連盟(League of Women Students and Graduates from University and Egyptian Institutes)を1944年から45年にかけて組織し、大学を中心に女性解放に向けた運動を展開した。この組織は1946年のレッドパージによって解散を余儀なくされたため、非常に短期間の活動であった。しかし、その急進的なイデオロギーは既存の女性団体とは異質であり、またムスリム同胞団から活動を妨害されるなど特異な存在であったと著者は見なしている。

また一方、1935年にはムスリム同胞団の活動を支援する女性組織として存在した、ムスリム女性同胞団が誕生した。このグループの創設者であるザイナブ・アル・ガザーリー(Zaynab al-Ghazālī)の、『我が人生の日々』(A72)は、同胞団に参加した経緯やムスリム女性同胞団の活動、ナセル政権のムスリム同胞団に対する弾圧や1957年から1960年代半ばにおける同胞団組織の再建活動、指導者であるサイド・クトゥブなどを

回顧したものである。また、ホフマン(V. Hoffman)の『イスラーム活動家；ザイナブ・アル・ガザーリー』(E53)は、上記の文献の投獄記部分の英訳とガザーリーへのインタビューからなり、彼女たちの活動や思想の一端を知ることができる。

さて、ハッダード(Y. Y. Haddad)は、『20世紀のアラブ思想におけるイスラーム、女性、革命』(E50)において、西欧のフェミニズム運動と対比させてアラブフェミニズム運動の特徴は次の3点にあると論じている。

- (1) 女性個人の自由の概念に基盤を置くものではない。
- (2) 女性の解放は、いわゆる良妻賢母の女性や女性労働者を生み出すためであるというような男性の関心を優先させなければならなかった。
- (3) フェミニズム運動は、常に流行遅れになった文化規範や退廃的な社会習慣、あるいは外国支配から社会を解放するための全体的な運動の一部でしかなかった。

つまり、ハッダードは、アラブフェミニズム運動は、性の解放を主張したものではなく、近代的、革命的、急進的、あるいはイスラーム的というような新たに支持されたり、計画されたシステムに適合するような枠組みのなかに限定された運動であった点を強調している。

IV. 1952年革命以降における エジプト政治と女性の政治参加

ムハンマド(A. T. Muhammad)の『エジプト女性：過去と現代において』(A79)は、エジプト女性問題の概説書とも言うべき文献である。特に第4章『エジプト女性と政治的権利』では、女性問題における1952年革命の重要性を次のように位置づけている。「1956年憲法は、エジプト女性に政治的権利を付与したことにおいて重要

であることは明白であるが、最も重要なことは、女性の社会と家庭の両面における役割の両立を保障したことである。」すなわち、1956年憲法において公共の義務と権利を規定した第3条31項では、「法の下でエジプト人は平等であり、公共の権利、義務において平等である。性、出生、言語、宗教、主義によって彼らの間を差別するものではない。」と定めている。また、続く1962年にナセル大統領が発表した『国民憲章』(A59)では、法の下での男女平等の基盤を「女性は、男性と平等であり、また生活設計において深く、建設的に参加できるように女性の自由な運動を妨げる、いまなお残存する足枷を断ち切らなければならない。」(『生産と社会』の項)と謳い、さらに女性の権利を保障している。著者は、家庭は社会の基本的な核であり、国家は、家庭を支援し保護する義務があるとする国民憲章、および1964年憲法の精神が、サダトの1971年憲法や1974年の『10月文書』(A35)にも次のように引き継がれていると述べる。すなわち、「国家は、イスラーム法の規則に反しない限りにおいて、家庭における女性の義務と社会における労働の両立、および政治、社会、文化、経済生活における男性との平等を保障する。」(1971年憲法第2条11項) さらに、「私が社会開発領域において用いるエジプト人という言葉は、女性と男性からなる社会全体を意味する。なぜなら女性は社会の半分を構成し、我々の発展のための包括的な戦略のなかに女性の参加を拒否することは、社会の能力の半分の否定することになるからである。」(『10月文書』第3章第2項将来における女性の役割) という文章がそれである。

このようなナセル期とサダト期の憲法上における女性の位置の比較をめぐっては、2つの異なった見解が示されている。まずグラン(J. Gran)は、『エジプト女性に対する世界市場のインパクト』(E49)において、サダトの1971年憲法には

イスラーム尊守と家庭における女性の義務をより強化した保守的な傾向がみられるとする。これに対して、サリバン(E. L. Sullivan)は、『エジプトにおける女性と労働』(E81)のなかで、グランのような意見は単に文章の解釈上の違いであるとする。すなわち、サダトの政策は、男女の協力と共生という関係における男女の権利を表すもので、その後実施された人民議会における女性議席の特別枠の設置や、離婚における女性の地位をより有利に改めた身分法の改正等からみて、必ずしも女性に対する保守化政策ではないとサリバンは捉える。

さて、1956年憲法によって女性の参政権が初めて認められたが、ムハンマドの上記の文献(A79)によると、1957年の選挙人名簿登録者数は男性557万5792人に対し、女性は僅か14万4983人で全登録者数の2.5%に過ぎず、これまでの女性運動の脆弱な基盤をここに窺い知ることができる。女性参政権に関するカイロでの世論調査結果(ディヤーブ [F. Diyāb] の『世論とその測定方法』(A33)1962年カイロ大文学部修士論文を引用)では、女性選挙権の賦与について賛成者が64.1%、反対者が33.4%、また被選挙権の賦与については賛成が54.9%、反対が42.6%という数字がある。反対の主な理由としてムハンマドは、女性のいるべき場所と義務は、家庭と家事であり、社会が必要とするのは男性であって、男女は同等ではないとする社会的・宗教的伝統に由来する思想が原因であるためと分析している。

さらにサダト政権期の女性の政治参加について、ムハンマド文献(A79)によると、社会主義連合(Arab Socialist Union: 以下ASU)の基盤が整備されるのに従い、ASUの女性会員数も22万8930人に増加したが、全体からみれば4.8%に過ぎなかったため、女性の組織化や女性会員の奨励のために種々の試みがなされたという。たとえば、その試みのひとつがASUの各支部

に女性のための1議席を特別に設置することであったが、これはその後の各県の地方人民議会に10~20%の女性議席の設置を義務づける規定(1979年23号地方行政法)や、人民議会に女性の30議席を特別枠として設ける措置(1979年22号法)につながっていった(しかし、1987年の人民議会選挙以降にはこの特別女性議席は、憲法に保障された男女平等の原則に反するという理由で廃止された)。また、サダト期には各種職業組合やシンジケートにおいても女性会員の進出がみられた。さらに注目すべきは、1925年以降、再三の試みにもかかわらず、手をつけられずにいた身分法の改正(1979年44号法)が実現した。著者は、これらの奨励措置について「国連婦人10年」との関連性やサダト大統領夫人ジハーン・サダト(Jihan Sadat)の努力を指摘している。

なお、エジプト女性問題グループの『エジプト女性の法的権利；理論と適用において』(A78)によると、1986年の選挙人名簿登録者数は選挙権を有する女性全体の18%で、農村部の方が都市部よりも登録者数が多いことが報告されている。

さて、研究者らは、ナセル以降の女性の政治参加をどのように捉えているだろうか。

まず、スマック(A. C. Smock)とユーセフ(N. H. Youssef)の『エジプト；隔離から制限された参加へ』(E79)は、ナセル・サダト期の女性の政治参加について大きな進展を認めながらも、種々の矛盾した二面構造を指摘するものである。まず第1点は、憲法や国家憲章のような公的な声明のなかで国家開発における女性の重要な役割を規定しているにもかかわらず、女性の地位改善の妨げとなっている身分法の根本的な改正がなされなかった点である。また第2点は、1963年にアブー・ゼイド(Hikmat Abū Zeid)が社会問題大臣に指名されて以来、このポストは女性に継承されている点で女性の政治参加に対す

る最も重要な政府の方針と受け取れる。しかし、社会問題省への女性の起用は、そもそも伝統的な女性団体との関係を反映したものであり、重要な行政ポストは依然として男性が独占し続けていることである。そして第3点は、女性運動がASUの範囲内での活動に制限されていた点などであり、結果として女性の政治参加の限界を指摘する。

同様にルトゥフィー(S. Lutfi)も『アラブ女性の政治参加に関する文献への評論』(A77)のなかで、多くの文献を引用しながら、現代の女性の政治状況について次のように述べる。すなわち、要約すると「ナセル革命後、上から与えられた権利、法的変化はあったが、根本的な社会変化をもたらすような変革はなく、女性の権利とその現実には大きな隔りがあり、女性は家族と男性のなかで道徳や宗教および教育的な価値観における根強い伝統によって依然として苛まれている。ほとんどの女性は、政治意識が希薄であり、法によって付与された政治参加は、むしろ小規模なものに留まり、女性運動そのものも衰退してしまった。確かに、1919年革命期の女性デモに始まるエジプトの女性運動は、参政権の獲得のような女性の政治的権利獲得の運動にまで拡大され、それが成就したのは、ナセル革命によって制定された1956年憲法においてであった。しかし、同時に今まで存在したワフド党、エジプト女性党などの政治団体はもちろんのこと、ビント・アル・ニール連盟、エジプト女性連盟などの女性団体も解体を余儀なくされた。また、ナセル革命は、女性の解放や実際の政治的権利の実行の障害と思われる身分法には介入しなかった。」ルトゥフィーは特に、女性の大多数である農村女性や都市における下層の女性の公的政治からの隔絶を問題とし、上から強制された政治システムの枠組みにおける女性を含めた国民全体の政治参加の限界を指摘す

る。

また、ルトゥフィー文献(A77)は、サダト期における一連の女性の政治参加を支援する法律の制定や身分法の改正について、「これらの法の適用は、ごく一部の女性の役割や地位を支援するための女性に関連した法や決定でしかなかった。また、各政党は、女性に関心を持ち、女性の政治的役割を支援するような印象、言葉をその綱領に含んではいたが、政党内における女性の政治活動や運動は、その要求と比べて充分なものではなかった。」と批判的である。

また、野党ワド党の女性指導者で、1990年人民議会選挙では大統領指名で人民議会議員になったウバイド(M. M. 'Ubayd)は、『女性と政治参加』(A61)においてルトゥフィーとほぼ同様の批判を展開し、女性の権利や政治的決定権と現実のギャップや既成政党がただ単に数として女性を利用している側面を指摘する。

以上の他に、1970年代における政治的状況と女性の関わりを知るうえで興味深い文献としてナッワール・サアダーウィー(Nawwāl Sa'dāwī)の『エジプト女性問題：政治と性』(A40)がある。彼女は、アラブを代表する女性解放運動家として世界的に知られた存在である。この一部を簡単に紹介してみよう。「70年代後半以降に顕著になった社会現象は、湾岸諸国への出稼ぎ労働者の急増と、門戸開放政策という2つの要因が重なって、西欧の奢侈的文化や服装、生活様式が流入し、いわゆるイスラーム的道德の退廃がみられた。また一方では、貧富の格差の増大や未解決の国内失業問題、さらにまた、キャンプデービッド後にはアラブ世界におけるエジプトの政治的孤立などによって社会的危機意識が強まった時期でもあった。そして、このような危機意識のなかからイスラーム復古運動への支持者が男女を問わず顕著に現われてきた。特に女性にイスラーム的道德や服装を強制し、失業

問題の解消のために女性を家に帰す呼び掛け、あるいは仕事のための外出を辞めさせる呼び掛けがなされ、女性に対するコントロールを強化しようとする動きが現われるようになった。」サアダーウィーは、これを女性に対する性的抑圧と経済的抑圧であり、偽造された道德で女性を束縛するものであると述べる。また、女性を被抑圧者として捉え、エジプト議会の50%は、被抑圧者である労働者、農民にその議席を与えているにもかかわらず、女性にはその機会すら与えず、サダト大統領時代に設けられた30名の女性議席の是非はともかく、それすら近年廃止されてしまった現状を批判している。

また、女性問題に対するサダト、ムバーラク体制を論じた文献のなかでは、ハーテム(M. F. Hatem)の『エジプトにおける経済的・政治的自由化と国家フェミニズムの継承』(E51)が興味深い。同文献は、ナセル体制が男女平等の社会的権利を認めた、いわゆる国家フェミニズムが、サダト、ムバーラク体制における自由主義化政策によってどのように継承されていったかを考察したものである。「国家フェミニズム」(state feminism)とは、北欧の学生たちによって使われる用語で、女性の生産および再生産的な役割において重要な変化を導く野心的な国家計画や政府の政策を意味するという。この公的な関係の再生産によって、あるいは国家部門における女性雇用の増加によって男女間の不平等を生んでいる構造的な基盤の排除を狙うものである。彼女は、まず1950~60年代をエジプトの国家フェミニズムの時代として位置づける。しかし、サダト以降の経済的・政治的自由主義体制は、中間層下層や労働階級の女性の労働参加を阻害し、少数の中産階級や中間上層の女性のみにも利益を享受させたと思えず。そして、結果的には男女の平等や自由を向上させず、逆に女性間の経済的・社会的、あるいはイデオロギー的な隔壁を生

み出し、さらに男女間の不平等の新たな形態を導いたと説明している。

さて、以上に紹介したように、主としてエジプト人左派の研究者たちは、女性の政治参加や社会参加における制約の問題や影響力の欠如を指摘しているのに対して、欧米の研究者の文献には、エジプト政治の意思決定メカニズムと女性の影響力を評価したものがみられる。たとえば、ネルソン(C. Nelson)の『男女の変化する役割：エジプトの例』(E63)や『公的及び私的的政治：中東世界における女性』(E64)は、ベドウィンの女性に、またハワード・メリアム(Howard-Merriam)の『エジプトの別な政治エリート』(E55)やサリバン(E. L. Sullivan)の『エジプトの公的生活における女性』(E80)は、「エリート」女性に焦点をあてて論じている。たとえば、サリバンの文献は、大統領夫人や女性国会議員、野党女性幹部、エリート管理職あるいはエリート官僚の女性のような、いわば権力機構に近い少数の女性たちに焦点をあて、彼女らがエジプト社会のなかでいかにして現在の地位を獲得したか、あるいは女性の地位の向上にどのように貢献したかを考察し、これによってエジプト女性が闘っている政治的経済的環境を論じようとするもので興味深い。特にサリバンは、エジプト史における女性の役割を重要視し、このような女性研究は、政治や経済を分析する重要な手がかりとなるだろうと主張している。したがって、エジプトの政治的経済的な意思決定システムにおける女性の参加に関するマクロ、ミクロレベルの調査の必要性を指摘するものである。

その他に、実態調査に基づいて現代の女性の政治意識とそれに及ぼす影響について論じた文献がある。たとえば、政治と教育との関連で捉えたアニーナ(M. Anīna)の『エジプト女性の政治的知識における非識字の影響：都市女性の実態調査』(カイロ大学、政経学部修士論文)(A68)

がある。この文献は、カイロの庶民地区において実施した政治に対する意識調査を分析したもので、一般に都市女性の政治意識の低さや選挙、政治団体、慈善団体の活動が少ない点から政治参加に対する関心の低さを指摘する。さらに教育を受けた女性と非識字女性を比較し、後者の方が裁判や法律、政府組織の機能に対する認識、有名政治家の名前や政治団体についての知識が前者よりも少なく、彼女らの生活に対する政府の影響をあまり認めていないという。

また、ドッド(P. C. Dodd)の『エジプトにおける青年と女性の解放』(E39)は、女性解放が男性の支援によるところが大きいという観点から青年男子の意識調査を行ったものである。

V. 現代の女性運動の現状

1979年に改正された身分法(44号法)は、離婚や子供の養育権に関して妻の権利を大きく改善させたものであったが、1985年5月4日に最高裁判所から違憲判決が下され、無効になってしまった(身分法については本書第3章参照)。しかし、多くのフェミニストの努力によってわずか1カ月足らずのうちに新たな身分法(100号法)が成立し、これを契機として女性運動が再び活発化した。ここで、現在活動している女性団体あるいは女性運動家を紹介してみよう。

まず、前述したナッワール・サアダーウィーが指導するアラブ女性連帯協会(Arab Women's Solidarity Association：以下AWSA)がある。この団体の目的や活動方針については1986年に開催された第1回AWSA会議の報告書として刊行された『アラブ世界の女性：来る挑戦』(E31)や『アラブ女性連帯協会について』(A42)に詳しく記されている。この組織の目的として特に、女性の問題と社会の問題との関係を女性に理解させることによって女性を組織し、政治的、経済的、社会的、文化的な活動に女性の参加を図

ることが強調されている。メンバーは、主に中間層上層のリベラルな立場をとる女性たちとみられる。また、ドゥワイヤー(K. Dwyer)の『団結する女性たち』(E40)は、サアダーウィーとAWSAのメンバーに対するインタビューを含むもので興味深い。他に1988年に開催された第2回AWSA国際会議報告書である『現代アラブ思想と女性』(E32)がある。

しかし、AWSAカイロ支部の活動は、1991年6月に同支部の財務管理上の違反と、1990年の湾岸危機において政府政策を批判したという理由で事務所の閉鎖命令を受けてしまったため、活動を中止せざるをえない状況になっている(『エジプト；裁判所は女性団体の閉鎖を支持する』(E42))。この閉鎖措置からも窺えるように、AWSAカイロ支部は、女性問題に関する活動ばかりではなく、たとえば湾岸戦争期に女性ジャーナリズム会議を開催して政府批判を行うなど、かなり政治的な運動を行っていた。このような政治的運動は、指導者であるサアダーウィーの影響によるところが大きいと思われる。ここで簡単に彼女について紹介してみよう。

サアダーウィーは、内科医として保健省保健教育局長の職にあったが、また著述家としても多くの作品を著している。たとえば、自伝的な小説である『女性内科医の思い出』(A43)(E71)、一女囚の生い立ちや環境を描いた『ポイントゼロの女性』(A38)(E73)等の小説や、エジプトの女子割礼や性をめぐる問題、また、女性の解放などエジプトの女性問題を幅広く論じた『イブの隠れた顔』(E72)などがある。これらは、幼年期からの成長過程において培われるジェンダー概念や女性差別の現状などを文学および言論活動を通じて真正面から訴えており、エジプトやアラブ世界よりも、むしろ先進国において高い評価を得ている。特に彼女は、1972年には『女性と性』(A39)(A44)を出版して、それまでアラブ世界においてタブ

ーとされていた性や宗教、政治の問題に起因する女性の経済的、あるいは性的な抑圧を告発したため、宗教界と保守派から激しい攻撃を受けた。そしてサアダーウィーの著書は、エジプトで発禁になり、また、彼女はそれまで就いていた保健教育局長の職を追われてしまったのである。彼女は、かなり政治的な活動を行っており、1981年9月にサダト政権がイスラエルに対する政治批判勢力を一斉に弾圧した際には、投獄されたひとりであった。彼女の女性解放の思想は、マルクス・エンゲルスの社会主義思想に依拠するところが多く、女性の解放は、帝国主義、資本主義および階層間の搾取からの解放と結び付いたものとする。加えてアラブ社会の場合には、男性支配に基づいた家長長制からの女性の解放を強調するものである。したがって、女性の地位改善には社会全体の前進が不可欠であり、そのためには女性たちがよく組織された政治勢力を持つ必要があるという彼女の思想がある。しかし、エジプト国内では、彼女の思想はかなり急進的と見なされ、大勢に受け入れられていないのが現状である。

この他の女性団体には、アジーザ・フセインをはじめ7人の女性知識人によって組織された、エジプト女性問題グループ(Majmū'at al-muh-tammāt bi-shu'un al-mar'a al-miṣrīya)がある。この組織は、政治・経済・社会的領域における女性の向上を目的としたもので、1988年には女性に法律知識を拡めるために『エジプト女性のための法的権利：その理論と適用において』(A78)を刊行している。同書は、小冊子ではあるが、女性に関連する労働法、社会保険法、身分法、および政治的権利を簡潔にまとめると共に、女性に対するこれらの法律や権利の適用における問題点をあげている(本書第3章および第4章参照)。

また、アイダ・ギンディー(Aida Gindy)をは

はじめとするカイロ・アメリカン大学の女性卒業生を中心にしてインフォーマルに組織された、エジプト専門職女性のネットワーク (The Network of Egyptian Professional Women) がある。1988年には会員174名の履歴や専門および活動分野を記載した『社会開発におけるエジプト女性：リソースガイド』(E66) を刊行しているが、実質的な活動は、今までのところ特にみられない。なお、同書の序文は、現大統領夫人であるスーザン・ムバーラクによるものである。

一方、イスラーム原理主義運動に影響された女性団体の活動は、種々のセミナーを開催するなどかなり活発である。たとえば、エジプトにおけるイスラーム原理主義運動の最大の組織は、ムスリム女性同胞団であり、この系列の雑誌『ハージル』(hājir) (世俗を断ち切ることの意) や小冊子が数多く刊行されている。イスラーム系

の女性団体の研究のためには、このような雑誌や小冊子類が有益な資料となるであろう。

これらのイスラーム原理主義団体の女性の活動について激しく非難した文献には、スィナー・アル・ミスリー (S. Miṣrī) の『ペールの影で；女性問題に関するイスラームグループの状況』(A82) がある。同書は、特に20世紀初めのムスリム女性同胞団と女性解放運動との対立やムスリム同胞団の創始者であるハサン・バンナーの女性に対する意見を引用して、その保守的な思想を批判している。さらに、イスラーム原理主義者がコプト教徒やマイノリティー、貧困層を差別しているとして激しく非難するものである。なお、同書は、1992年にイスラームの教義に反するとして、アズハル・イスラーム研究アカデミーによってイスラーム原理主義を非難した数冊の本とともに発禁にされている。

<文献目録—アラビア語>

- (A 11) أبو العزم، عبد الغنى: المرأة العربية - الواقع وقضايا التحول.
شئون عربية (5) يوليو 1981: ص. 129-141.
- (A 12) أحمد، أحمد طه: المرأة كفاحها وعملها. القاهرة، دار الجماهير،
1964. 120 ص .
- (A 13) أسعد، يوسف ميخائيل: المرأة والحرية. القاهرة، دار نهضة مصر
للطبوع والنشر، 1977. 214 ص .
- (A 14) أفلاطون، أنجي: 80 مليون امرأة معنا. القاهرة، مطبعة مصر،
1948. 56 ص .
- (A 15) أفلاطون، انجي: نحن .. النساء المصريات. القاهرة، 1949. 114 ص .
- (A 16) امام، عبد الله: صفحات من تاريخ المرأة المصرية. القاهرة،
مؤسسة روز اليوسف، 1987. 241 ص .
- (A 17) الأمم المتحدة. اللجنة الاقتصادية والاجتماعية لغربي آسيا:
دراسة استطلاعية حول خصائص ومشكلات المرأة في القطاع غير الرسمي
في حي شعبي بمدينة القاهرة. بغداد، 1989، 129 ص
(سلسلة دراسات عن المرأة العربية في التنمية، 15)
- (A 18) أمين، قاسم: تحرير المرأة. القاهرة، مطبعة عين شمس، 1899/
دار المعارف، 1970. 189 ص .
- (A 19) أمين، قاسم: المرأة الجديدة. القاهرة، مطبعة الشعب، 1901/
1911. 229 ص .
- (A 20) أنيس، محمد ومحمد رجب حراز: تطور السياس للمجتمع المصرية الحديث.
القاهرة، دار النهضة العربية، 1972.
- (A 21) باحثة البادية: النساءيات - مجموعة مقالات نشرت في الجريدة في
موضوع المرأة المصرية، الجزء الاول. القاهرة، مطبعة الجريدة،
1910. 176 ص .

- (A 22) شابت، منيرة: ثورة فى ... البرج العاجى ! مذكراتى فى عشرين عاما عن معركة حقوق المرأة السياسية . القاهرة، دار المعارف، 1945 . 191 ص .
- (A 23) جاء، عطيات محمود: المرأة فى الميثاق . القاهرة، الدار القومية للطباعة والنشر، 1962 . 48 ص .
- (A 24) جمعية تضامن المرأة العربية: التحديات التى تواجه المرأة العربية فى نهاية القرن العشرين . القاهرة، 1986 . 355 ص .
- (A 25) جمعية تضامن المرأة العربية: الفكر العربى المعاصر والمرأة - المؤتمر الدولى الثانى . القاهرة، 1988 . 212 ص .
- (A 26) حسن، على ابراهيم: نساء لهن فى التاريخ الاسلامى نصيب . القاهرة، مكتبة النهضة المصرية، 1980 . 160 ص .
- (A 27) حلمى، منى: رجل جديد فى الافق . القاهرة، دار تضامن المرأة العربية، 1988 . 215 ص .
- (A 28) خاكى، أحمد: المرأة فى مختلف العصور . القاهرة، دار المعارف، 1946 . 144 ص .
- (A 29) الخطيب، حكمت صباغ: قاسم أمين، اصلاح المرأة . بيروت، بيت الحكمة، 1970 . 111 ص .
- (A 30) خليفة، اجلال: الحركة النسائية الحديثة - قصة المرأة العربية على أرض مصر . القاهرة، المطبعة العربية الحديثة، 1973 . 271 ص .
- (A 31) الخماش، سلوى: المرأة العربية والمجتمع التقليدى المتخلف . بيروت، دار الحقيقة، 1973 . 112 ص .
- (A 32) خميس، محمد عطية: المرأة والحقوق السياسية والاعمال العامة - رأى الهيئات والجمعيات الاسلامية فى مصر . القاهرة، دار الانصار، 1978 . 140 ص .

- (A 33) دياب، فؤاد: قياس اتجاه الرأى العام نحو منح المرأة حقوقها السياسية . القاهرة ، كلية الآداب ، جامعة القاهرة ، 1960 .
(رسالة ماجستير غير منشورة)
- (A 34) الرملى، سعاد: كفاح المرأة . القاهرة ، دار الطباعة المصرية الحديثة ، 1948 . 66 ص .
- (A 35) السادات، محمد أنور: ورقة أكتوبر . القاهرة ، الشعب، 1984 . 64 ص .
- (A 36) سالم، لطيفة محمد: المرأة المصرية والتغيير الاجتماعى 1919-1945 . القاهرة ، الهيئة المصرية العامة للكتاب، 1984 . 201 ص .
- (A 37) السيكى، آمال كامل بيومى: الحركة النسائية فى مصر- ما بين الثورتين 1919 و 1952 . القاهرة ، الهيئة المصرية العامة للكتاب، 1986 . 216 ص .
- (A 38) السعداوى، نوال: امرأة عند نقطة الصفر . القاهرة ، مكتبة المدبولى، 115 ص .
- (A 39) السعداوى، نوال: الانثى هى الاصل . القاهرة ، مكتبة مدبولى، 1977 . 245 ص .
- (A 40) السعداوى، نوال: قضية المرأة المصرية - السياسية والجنسية . القاهرة ، دار الثقافة الجديدة ، 1977 . 51 ص .
- (A 41) السعداوى، نوال: عن المرأة . القاهرة ، دار المستقبل العربى، 1988 . 210 ص .
- (A 42) السعداوى، نوال: عن تضامن المرأة العربية . القاهرة ، جمعية تضامن المرأة العربية ، 1989 . 49 ص .
- (A 43) السعداوى، نوال: مذكرات طبية . القاهرة ، مكتبة مدبولى، 2ط . 1980 . 110 ص .
- (A 44) السعداوى، نوال: المرأة والجنس - الانثى هى الاصل . بيروت، المؤسسة العربية للدراسات والنشر، 1974 . 234 ص .

- (A 45) سيدهم ، سميحة : تحرير المرأة فى مصر كحركة اجتماعية .
المجلة القومية ، (1) 3 يناير 1966 : ص 39-42 .
- (A 46) الشطبي ، محمد عمر : جيهان السادات - رائدة المرأة العربية ، ط 2 .
القاهرة ، دار الفكر العربى ، 1977 . 96 ص .
- (A 47) شعراوى ، هدى : السلام العالمى - نصيب المرأة فى تحقيقه . القاهرة ،
مطبعة مصر ، 1938 . 23 ص .
- (A 48) شعراوى ، هدى : مذكرات رائدة المرأة العربية الحديثة . القاهرة ،
دار الهلال ، 1981 . 457 ص .
- (A 49) شفيق ، أمينة : المرأة لن تعود الى البيت . القاهرة ، دار الثقافة
الجديدة ، 1987 . 36 ص .
- (A 50) شفيق ، درية : رحلتى حول العالم . القاهرة ، دار بنت النيل . 243 ص .
- (A 51) شفيق ، درية : المرأة المصرية من الفراعنة الى اليوم . القاهرة ،
مطبعة مصر ، 1955 . 290 ص .
- (A 52) شفيق ، درية و ابراهيم عبده : تطور النهضة النسائية فى مصر .
القاهرة ، مطبعة التوكل ، 1945 . 151 ص .
- (A 53) صالح ، سامية خضر : المشاركة السياسية للمرأة وقوى التغيير الاجتماعى -
التعليم - العمل - الوضع الاجتماعى ، الجزء الأول . القاهرة ، الصدر
لخدمات الطباعة ، 1989 . 184 ص .
- (A 54) عبد الرازق ، أحمد : المرأة فى مصر المملوكية . القاهرة ، مكتب الشريف
وسعيد رافت ، 1975 . 222 ص .
- (A 55) عبد العال ، اسماعيل حسن : المرأة والتنمية فى مصر . القاهرة ،
دار المعارف ، 1979 . 194 ص .
- (A 56) عبد الله ، صوفى : نساء محاربات . القاهرة ، دار المعارف ، 1951 .
- (A 57) عبد المجيد ، فايز : المرأة فى ميادين الكفاح . القاهرة ، دار الكتاب
العربى للطباعة والنشر ، 1967 . 132 ص .

- (A 58) عبد الملك، بلسم: ذكرى باحثة البادية . القاهرة، المطبعة المصرية
الاهلية ، 1920 . 64 ص .
- (A 59) عيد الناصر، جمال: الميثاق القاهرة ، 1962 . 151 ص .
- (A 60) عبده ، محمد: الاسلام والمرأة فى رأى الامام . تحقيق محمد عمارة .
القاهرة ، دار للثقافة العربية ، 1970 . 143 ص .
- (A 61) عبيد، منى مكرم: المرأة والمشاركة السياسية . (ندوة المرأة والتنمية
القومية) القاهرة ، المركز الاقليمى العربى للبحوث والتوثيق فى
العلوم الاجتماعية ، 1984 : ص 133-139 .
- (A 62) العربى، شهرزاد: البعد السياسى للحجاب . القاهرة ، ازهراء للاعلام
العربى ، 1989 . 139 ص .
- (A 63) عمارة ، محمد: الاسلام والمرأة فى رأى الامام محمد عبده .
القاهرة ، دار المستقبل العربى ، 1985 . 198 ص .
- (A 64) عمارة ، محمد: الاسلام والمرأة فى رأى الامام محمد عبده ،
القاهرة ، دار الهلال ، 1979 . 160 ص .
- (A 65) عمارة ، محمد: قاسم أمين - تحرير المرأة والتمدد الاسلامى .
بيروت ، دار الوحدة ، 1985 . 224 ص .
- (A 66) عمارة ، محمد: قاسم أمين وتحرير المرأة . القاهرة ، دار الهلال ، 1980 .
178 ص .
- (A 67) العربى، شهرزاد: البعد السياسى للحجاب . القاهرة ، الزهراء للاعلام
العربى ، 1989 . 139 ص .
- (A 68) عنيمة ، أحمد شفيق: أثر الآمية على الثقافة السياسية للمرأة المصرية -
دراسة ميدانية للمرأة الحضرية . (رسالة مقدمة للحصول على درجة
الماجستير فى العلوم السياسية ، 1982)
- (A 69) عويس، سيد: حديث عن المرأة المصرية المعاصرة . القاهرة ، مطبعة
أطلس ، 1977 . 287 ص .

- (A 70) عويس، سيد: قضية المساواة بين الرجل والمرأة فى الواقع المصرى. المجلة الاجتماعية القومية، 14(1/3)، 1977: ص. 73-90.
- (A 71) عياد، عبد الفتاح: نهضة المرأة المصرية والمرأة العربية فى التاريخ. القاهرة، مطبعة الهلال، 1919. ص 49.
- (A 72) الغزالى، زينب: أيام من حياتى. القاهرة، دار الشروق، 1982.
- (A 73) الغزالى، زينب: نحو بعث جديد. القاهرة، دار الشروق، 1987.
- (A 74) فراج، محمد فرغلى: تطور مشاركة المرأة المصرية فى الحياة العامة. (تغير الوضع الاجتماعى للمرأة فى مصر المعاصرة، إشراف مصطفى سيوف) القاهرة، المركز القومى للبحوث الاجتماعية والجنائية، 1974: ص. 174-216.
- (A 75) فريد، أمانى: المرأة المصرية فى البرلمان. القاهرة، مطبعة التوكل، 1947. ص 152.
- (A 76) فهمى، سامية محمد: المرأة فى التنمية - الفصل الخامس المرأة المعاصرة والتعليم فى المرحلة من 1952-1970. اسكندرية، 1991: ص. 68-80.
- (A 77) لطفى، سهير: قراءة نقدية فى أدبيات المشاركة السياسية المرأة العربية. القاهرة، ESCWA/UNESCO، 1988: ص. 143-170. (ندوة الخبراء حول المرأة العربية والتغيرات الاجتماعية والثقافية (87
- (A 78) مجموعة المهتمات بشئون المرأة المصرية: الحقوق القانونية للمرأة المصرية بين النظرية والتطبيق. القاهرة، 1988. ص 44.
- (A 79) محمد، أحمد طه: المرأة المصرية بين الماضى والحاضر. القاهرة، مطبعة دار التأليف، 1979. ص 452.
- (A 80) مرزوق، زاهية: دور المرأة فى المعركة. الاسكندرية، الاتحاد الاقليمى للجمعيات والمؤسسات الخاصة، 1971. ص 27.

- (A 81) مصر. وزارة الشؤون الاجتماعية: دور المرأة العربية فى معركة البناء.
القاهرة، مطبعة مصر، 1938. 54 ص .
- (A 82) المصرى، سناء: خلف الحجاب: موقف الجماعات الاسلامية من قضية المرأة.
القاهرة، سينا للنشر، 1989. 118 ص .
- (A 83) مظهر، اسماعيل: المرأة فى عصل الديمقراطية. القاهرة، مكتبة
النهضة المصرية، 1952. 202 ص .
- (A 84) مؤسس حسين: حقوق المرأة ليست قضية نسائية - انها قضية الوطن
كله. مجلة الهلال (88) اكتوبر، 1980.
- (A 85) نظير، وليم: المرأة فى تاريخ مصر القديم. دار القلم، 1965.
135 ص .
- (A 86) هموم المرأة المصرية - ست البيت: فتحة مديولى. مجلة الطليعة
(11) 12 نوفمبر 1976: ص 82-102.
- (A 87) هموم المرأة المصرية - العاملة: رتيبة حسين. مجلة الطليعة
(11) 12 نوفمبر 1976: ص 61-81.
- (A 88) هموم المرأة المصرية - المثقفة: آمال كامل. مجلة الطليعة
(11) 12 نوفمبر 1976: ص 32-60.
- (A 89) الهيئة العامة للاستعلامات: المرأة فى حرب اكتوبر. القاهرة،
1974. 14 ص .
- (A 90) يحيى، محمد كمال: الجذور التاريخية لتحرير المرأة المصرية فى
العصر الحديث - دراسة عن مكان المرأة فى المجتمع المصرى خلال
القرن التاسع عشر. القاهرة، الهيئة المصرية العامة للكتاب،
1983. 131 ص .

<文献目録—欧語>

- (E26) Abdel Kader, Soha : Egyptian women in a changing society 1899-1987. Boulder, Lynne Reiner Publishers, 1987. 163 p.
- (E27) Abdel Kader, Soha : The status of Egyptian women, 1900-1973. Cairo, Social Research Center, American University in Cairo, 1973. 93 p.
- (E28) Ahmed, Leila : Arab women ; 1995. (The Next Arab decade, edited by Hisham Sharabi) Boulder, Westview Press, 1988 : p. 208-220.
- (E29) Ahmed, Leila : Between two world ; the formation of a turn-of-the-century Egyptian feminist. (Life/line ; theorising women's autobiography, edited by B. Brodzki & C. Shenck) Ithaca, Cornell University Press, 1988 : p. 154-174.
- (E30) Ahmed, Leila : Early feminist movements in the Middle East ; Turkey and Egypt. (Muslim women, edited by Freda Hussain) Beckenham, Croom Helm, 1984 : p.111-123.
- (E31) Arab Women Solidarity Association : Women of the Arab world; the coming challenge; papers of the 1st International Conference, Cairo. 1986. Edited by Nahid Toubia. London, Zed Books, 1988. 168 p.
- (E32) Arab Women Solidarity Association : Contemporary thought and women ; 2nd International Conference, Cairo 3-5 November 1988. Cairo, 1990. 182 p.
- (E33) Badran, Margot : The feminist vision in the writings of three turn-of-the-century Egyptian women. British Society for Middle Eastern studies bulletin 15(2) 1988: p. 11-20.
- (E34) Baron, B.: Unveiling in early twentieth century Egypt ; practical and symbolic considerations. Middle Eastern studies 25, 1989: p. 370-386.
- (E35) Beck, Lois & Nikki Keddie (ed.) : Women in the Muslim world. Cambridge, Harvard University Press, 1978. 698 p.

- (E36) Botman, Selma: The experience of women in the Egyptian communist movement, 1939-1954. *Women's studies international forum* 11(2) 1988 : p. 117-126.
- (E37) Botman, Selma: Women's participation in radical Egyptian politics, 1939-1952. (Women in the Middle East, edited by Khamsin Collective) London, Zed Books, 1987: p. 12-25.
- (E38) Cole, Juan Ricardo : Feminism, class and Islam in turn-of-the-century Egypt. *International journal of Middle East studies* 13(4) Nov. 1981 : p. 387-407.
- (E39) Dodd, Peter C.: Youth and women's emancipation in the United Arab Republic. *Middle East journal* 22(2) Spring, 1968 : p. 159-172.
- (E40) Dwyer, Kevin : Organizing women. (Arab voices; the human rights debates in the Middle East) London, Routledge, 1991 : p. 184-192.
- (E41) Early, E. A.: Bahithat al-Badiya ; Cairo viewed from the Fayyum oasis. *Journal of Near Eastern studies* 40, 1981 : p. 339-341.
- (E42) Egypt : Court upholds closure of women's organization. *Civil Society* July 1992 : p. 17-20.
- (E43) Eliraz, Giora : Egyptian intellectuals and women's emancipation, 1919-1939. *Asian and African studies* 16(1) 1982 : p. 95-120.
- (E44) Fenoglio-Abd el-Aal, I.: Feminisme et politique en Egypte. *Peuples méditerranéens* (48/49) 1989 : p. 151-162.
- (E45) Fernea, Elizabeth Warnock & Basima Qattan Bezirgan : Huda Sh'arawi ; founder of the Egyptian women's movement. (Middle Eastern Muslim women speak, edited by Elizabeth W. Fernea & Basima Q. Bezirgan) Austin, University of Texas Press, 1977 : p. 193-200.
- (E46) Fernea, Elizabeth & Robert A. Fernea : A look behind the veil. *Human nature* (2) 1979 : p. 68-77.
- (E47) Graham-Brown, S.: Feminism in Egypt : a conversation with Nawal el-Saadawi.

MERIP reports (95) Mar./Apr. 1981 : p. 24-27.

- (E48) Graham-Brown, Sarah : Image of women : the portrayal of women in photography of the Middle East, 1860-1950. New York, Columbia University Press, 1988. 251 p.
- (E49) Gran, Judith : Impact of the world market on Egyptian women. MERIP report (58) 1977 : p. 3-7.
- (E50) Haddad, Yvonne Y. : Islam, women and revolution in twentieth-century Arab thought. Muslim world 74(3/4) Jul./Oct. 1984 : p. 137-160.
- (E51) Hatem, Mervat F. : Economic and political liberalization in Egypt and the the demise of state feminism. International journal of Middle East studies 24(2) 1992 : p. 231-251.
- (E52) Hijab, Nadia : Democracy, development, and human rights ; can women achieve change without conflict? (The Next Arab decade ; alternative futures, edited by Hisham Sharabi) Boulder, Westview Press, 1988 : p. 45-52.
- (E53) Hoffman, Valerie J. : An Islamic activist ; Zaynab al-Ghazali. (Women and the family in the Middle East, edited by Elizabeth W. Fernea) Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 233-254.
- (E54) Hoodfar, Homa : Survival strategies in low-income neighborhoods of Cairo, Egypt. University of Kent, 1988.
- (E55) Howard-Merriam, K. : Egypt's other political elite ; the post 1952 female public leadership. Western political quarterly 34, 1981 : p. 174-187.
- (E56) Howard Merriam, Kathleen : The emergence of Egyptian women into public life of contemporary Egypt. Newsletter (American Research Center in Egypt) (94) 1975 : p.3-8.
- (E57) Hussein, Aziza : The role of women in social reform in Egypt. Middle East journal 7(4) Autumn, 1953 : p. 440-445.
- (E58) Khater, Akram & Cynthia Nelson : Al-harakah al-nissa'iyah; the women's movement and political participation in modern Egypt. Women's studies international forum

11(5) 1988 : p. 465-483.

- (E59) Lichtenstaeder, I.: The new woman in modern Egypt. *Muslim world* 38, 1948 : p.163-171.
- (E60) Marilyn, Booth : Prison, gender, praxis; women's prison memoirs in Egypt and elsewhere. *MERIP report* (149) Nov./Dec., 1987 : p. 35-41.
- (E61) Marsot, Afaf Lutfi al-Sayyid : The Revolutionary gentlewomen in Egypt. (Women in the Muslim world, edited by Lois Beck & Nikki Keddie) Cambridge, Harvard University Press, 1978 : p. 261-276.
- (E62) Minority Rights Group : Arab women. London, 1975. 20 p. (Report no. 27)
- (E63) Nelson, Cynthia : Changing roles of men and women ; illustrations from Egypt. *Anthropological quarterly* 41 Apr. 1968 : p. 57-77.
- (E64) Nelson, Cynthia : Public and private politics ; women in the Middle Eastern world. *American ethnologist* 1, Aug, 1974 : p. 551-563.
- (E65) Nelson, Cynthia : The voices of Doria Shafik ; feminist consciousness in Egypt 1940-1960. *Feminist issues* 6(2) Fall, 1986 : p. 15-31
- (E66) The Network of Egyptian Professional Women : Egyptian women in social development; a resource guide. Cairo, American University in Cairo Press, 1988. 346 p.
- (E67) Philipp, Thomas : Feminism and nationalist politics in Egypt. (Women in the Muslim world, edited by Lois Beck & Nikki Keddie) Cambridge, Harvard University Press, 1978 : p. 277-294.
- (E68) Rasheed, Baheega Sidky, et al. : The Egyptian Feminist Union. Cairo, Dar el-Maamoon Bookshop, 1973.
- (E69) el-Saadawi, Nawal : Arab women and Western feminism ; an interview with Nawal el-Saadawi. *Race & class* 22, 1980 : p. 175-182.
- (E70) el-Saadawi, Nawal : Creative women in changing societies ; a personal reflection.

Race & class 22, 1980 : p. 159-173.

- (E71) al-Saadawi, Nawal : Growing up female in Egypt ; from Mudhakkirat tabiba.
(Women and the family in the Middle East ; new voice of change, ed. by E. W. Fernea)
Austin, University of Texas Press, 1985 : p. 111-120.
- (E72) el-Saadawi, Nawal : The hidden face of eve ; women in the Arab world. London,
Zed Press, 1980. 212 p.
- (E73) al-Saadawi, Nawal : Women at the point zero. London, Zed Press, 1980.
- (E74) al-Sa'id, Amina : The Arab woman and the challenge of society. (Middle Eastern
Muslim women speak, edited by Elizabeth W. Fernea & Basima Q. Bezirgan) Austin,
University of Texas Press, 1977 : p. 374-390.
- (E75) Shafik, Doria : Egyptian feminism. Middle Eastern affairs 3, Aug./Sept. 1952 :
p. 233-238.
- (E76) Shaarawi, Huda : Harem years; the memoirs of an Egyptian feminist. Tr. and intro. by
Margot Badran. London, Virago Press, 1986. 158 p.
- (E77) Shaarawi, Huda : Haremjaren ; de memoires van de Egyptische feministe Hoeda
Shaarawi, edited by M. Badran. Authos, 1987. 180 p.
- (E78) Schilling, Nancy Adams : The social and political roles of Arab women : a study in
conflict. (Women in contemporary Muslim society, edited by Jane I. Smith)
London, Bucknell University Press, 1980 : p. 100-145.
- (E79) Smock, Audrey Chapman & Nadia H. Youssef : Egypt ; from seclusion to limited
participation. (Women, roles and status in eight countries, edited by Janet Z. Giele &
Audrey C. Smock) New York, John Wiley & Sons, 1977 : p. 35-79.
- (E80) Sullivan, Earl L.: Women in Egyptian public life. Cairo, American University Press/
Syracuse, Syracuse University Press, 1987. 223 p.
- (E81) Sullivan, Earl L.: Women and work in Egypt. (Women and work in the Arab world,
edited by Earl L. Sullivan & Karima Korayem) Cairo, American University in Cairo,

1981 : p. 1-44. (Cairo papers in social science 4(4))

- (E82) Tomiche, Nada : The position of women in the United Arab Republic. *Journal of contemporary history* 3(3) 1968 ; p. 129-143.
- (E83) Tomiche, Nada : The situation of Egyptian women in the first half of the 19th century. (Beginnings of modernization in the Middle East, edited by William Polk, et al.) Chicago, University of Chicago Press, 1968 : p. 171-184.
- (E84) Tucker, Judith : Insurrectionary women ; women and state in 19th century Egypt. *MERIP Middle East report* (138) Jan.-Feb. 1986 : p. 9-13.
- (E85) Tucker, Judith : Women in nineteenth century Egypt. London, Cambridge University Press, 1985. 251 p.
- (E86) Vial, Charles : Rifa'a al-Tahtawi (1801-1873) ; précurseur du féminisme en Egypte. *Maghreb-Machrek* (87) Jan.-Mar. 1980 : p. 35-48.
- (E87) Wasset, M. : La promotion de la femme égyptienne du XIX^e siècle a nos jours. *Maghreb-Machrek* (87) Jan.-Mar. 1980 : p. 49-60.